

海のグレートジャーニー

関野吉晴（武蔵美術大学名誉教授、多摩川病院医師、地球永住計画代表）

1971年から私はアマゾン、アンデス、ギアナ高地、パタゴニアなど南米ばかり20年間歩いてきた。1993年からアフリカで生まれた人類が世界中に移動、拡散していく中で最も遠くまで行った先人たちは、シベリア、アラスカ経由で南米最南端まで達した。私はそのルートを逆ルートで、自分の腕力と脚力で移動した。足かけ10年を要した。

世界中の辺境と呼ばれる地域を歩いてきた。旅の日数は5000日を超える。しかし外国ばかり歩いていて、自分の足元を見てこなかったことに気づいた。そこで私は国内を歩き始めた。同時に、日本列島にたどり着いた私たち日本人の祖先の足跡をたどる計画を立てた。

4万年前以降、日本列島にはさまざまな地域から人類が入って来た。その中で、主要なコースを3つに決め、2004年から辿り始めた。シベリアからサハリンを経由し、北海道に至る「北方ルート」。中国から直接、あるいは台湾、朝鮮半島経由の「中央ルート」。この2つのルートは以前と同じように自分の腕力と脚力だけで踏破し、2008年に終えた。

自然から素材をとり、自分で作る

最後のコースが東南アジアから日本列島に至る「海上ルート」だ。海上ルートは自分の腕力と脚力で進むだけでなく、さらなる縛りを設けることにした。ひとつはコンパスやGPS（全地球測位システム）、海図も使わずに航海するという。そしてもうひとつは、航海に使うカヌーを自分たちで手作りするという。日本列島にやってきた先人たちに思いを馳せる上で、その方が面白いと思った。加えて、ものづくりから始めることで、これまでにない新しい気づきがあると思ったのだ。

私は舟の時代性を追求するのではなく、作り方を追求することにした。そこで、太古の人たちがそうであったように「自然から素材をとってきて自分で作る」ことを基本にカヌー作りをすることにした。

砂鉄集め

まず砂鉄を集めることから始めた。「たたら製鉄」で鉄を作ることにしたのだ。たたら製鉄は太古から行われてきた製鉄法だ。今なお日本刀は、たたら製鉄から生まれた粗鋼から作る。そのため、唯一日本にだけたたら製鉄の伝統が残っていた。

カヌー造りのための道具を作る

「たたら製鉄で砂鉄から工具を作るのをお手伝いします。しかし、工具の重量が5kgなら、120kgの砂鉄を集めて下さい。」と、NPO「モノづくり教育たたら」を主宰している東工大教授(当時)の永田和宏さんから告げられた。

永田さんからは 120kg の砂鉄と同時に「300kg の炭も準備して下さい」と言われた。

私は、今回の旅を企画するにあたって、学生や卒業生に参加を呼びかけた。今回の全てを手作りで行う旅は、若い人達が 様々な気づきを得るいい機会になるだろうと思った。

ものづくりの大学である美術大学でも、「自然の中から自分たちで素材を取ってきて作る」ということをしていない。武蔵野美術大学には 11 の学科があるが、自然から素材を取ってくるということをしていない。

九十九里海岸で砂鉄を集め、岩手の葛巻で炭を焼き、鞆（ふいご）を作り、窯を作る素材を集めて、たたら製鉄の準備が整った。

300kg の炭作りを通して、鉄作りが如何に森林を破壊してきたかも学んだ。たった 5kg の工具を作るために 3 トンもの松材が必要だった。

たたら製鉄は武蔵野美術大学の金属工芸研の工房で 1 日ばかりで行った。最終的に約 25kg の鋳物のような母（けら）ができた。これを東吉野の刀匠、河内國平さんが焼いて、鍛えてくれて鋼ができた。刀匠の河内國平氏も手動の鞆を使っていた。炭を燃え上がらせて鋼を熱して、鍛えた。ところが刀鍛冶は日本刀は作るがオノやナタは作らない。そこで和歌山の新宮で野鍛冶の大川治さんに私たちが必要なナタ、オノ、ノミ、チョウナを完成してくれた。

インドネシアへ

2008 年 7 月、真新しい工具を持ってインドネシアに向かった。スラウェシ島のマンダール人に協力してもらって、カヌーを造ろうと思った。彼らは今も木造帆船を造っているからだ。

カヌー造りは難航した。チェーンソーもノコギリもドリルも使わずにカヌーを造りたいと言うと、船大工たちはそろって首を横に振った。板を継いだ構造船造りにはノコギリとドリルは不可欠だと言う。

それでも日本で作って持参した工具を用いた昔の方法でのカヌー造りをあきらめきれなかった。板を継がない丸木舟ならできそうだ。そのためには直径 1.5m 以上もの大木が必要だったが、そんな大木は容易には見つからない。私たちはマンダール人の伝統船パクール造りを進めながらも、わずかなチャンスを求めて、大木探しを進めた。

歩き回った末に、鬱蒼とした森でひとときわ高く、太い木があった。着生植物に覆われ、大きな板根で支えられていた。

巻き尺を使って周囲を計ってみると 6.3m あった。伐採してみると、3m の高さで直径 1.8m、高さは 54m あった。翌日からカヌー造りを始めた。設計図はない。私の注文を聞いて、棟梁が頭の中で描いたイメージを基にして、大木にカヌーの形を投影する。それを掘り出すように、穿ち、削り、カヌーの形を整えていった。短い太く、丸木舟としては破格に高さのある船体が姿を現してきた。ここまでが森の船大工の仕事だ。この荒削りの船体を海岸部の村に運んで、今度は海の船大工の協力で遠洋航海の出来るカヌーに仕上げる。

帆の材料を探す

カヌーの帆には天然素材で織ったものを使いたいと探していると、マンダール人がかつて使っていたいい素材があった。ラヌというヤシの若葉から作る素材だ。若葉を乾燥させ、細く裂いて糸を作って織る。

ロープを作る

ロープはイジュックというヤシの幹に絡まっている繊維を撚って作る。日本でも武蔵野美術大学の学生や卒業生がシュロから丈夫なロープを作った。このロープは舵や帆を引っ張るといった重要なところで使われた。

塗装

塗装はココナツヤシの油と隆起サンゴを焼いて、水を掛けるとできる消石灰とを混ぜたものを使う。日本やマヤでも消石灰に油を加えた漆喰を利用した。レパは塗装だけでなく、ひび割れや補修した穴の隙間の充填にも使った。

アウトリガー

2009年1月下旬に船体が完成した。船大工はアウトリガーには関わらない。クルーが取り付けるのだ。クルーが協力して組み立てることによって、協力し合う意識を高める意味があるという。

アウトリガーの取り付けには籐（とう）が必須品だった。水にぬれると締まるという性質もいい。最近は籐を使わずナイロン糸のテグスを使っているのだから、その技術を知っているのは老人たちだけだ。このことは塗装のレパ、植物樹脂のダマル、ラヌの帆などすべてに言えることだ。老人たちは生き生きとした顔をして、技術を披露し、指導してくれた。若者たちも過去のものとして知らなかったことを学び喜んでいった。

ずいぶん長い時間と労力を使った。もっと効率よく作ればよかったのと言う人は多い。しかし道具作りから始めたカヌー造りで気づいたことは計り知れないほど大きく、後悔どころか十分満ち足りていた。

航海（日本への旅）

2009年4月、スラウェシ島を出航し日本に向かった。コンパスやGPS、海図を航海に使うが、島影と星を頼りに、かつてこの海を渡った先人たちに思いを馳せて航海した。

日本人クルー4名、インドネシアのマンダール人クルー6名が協力してカヌーを進めた。年齢も宗教も異なるメンバーが、狭いカヌーの上で生活をともにした。台風はもちろん、風も波も潮も、私たちは自然を何ひとつコントロールできなかった。無風のときは櫂（かい）を絶えず漕がなければならず、逆風での停滞も多かった。だから自然の許す合間を縫

うようにして、自然の意のままに進んで行くしかなかった。

異文化共生の実験場のような航海だった。人的トラブルも多発した。しかし3年間も同じメンバーで航海できた。最後は家族のような仲になった。勿論カヌーの故障は頻発した。しかし自分たちで作ったカヌーなので、自分たちで補修できた。

最後の難関

台湾までやって来た。これから最後の難関に望もうとしていた。成功という幸先のいい名前の港にいた。沖縄の南端西表島経由で石垣島まで航海する。出航すると島影はない。背後から台風3号が近づいていた。

空は南に南十字星が北に北極星が同時に、それぞれ水平線に見えた。出発すると、快晴で強い南風が吹いていた。黒潮の力もあって今までにないスピードで、2日間で西表島西部に着いてしまった。それから石垣までは島伝いにいけばよかった。

最初の計画では1年目にゴールの石垣島に着く予定だった。しかし、スピードは予想の半分以下だった。3分の1は風を利用できたが、3分の1は漕ぎ、3分の1は待機した。結局足かけ3年間をかけ、2011年6月13日、無事航海を終えた。

クルーとして参加した教え子2人はたくましく成長した。航海1年の予定が3年になってしまったが、彼らは参加したことに後悔していない。しかし、2人とも一時燃え尽き症候群に陥った。しかし今はそれぞれの道を見つけた。

最近是人を育てるのにいい環境ではなくなった。人を短期間で評価するからだ。私はドキュメンタリー番組やドキュメンタリー映画の企画、制作にかかわってきた。2, 30年前には、「こいつは今は実績もないし、頼りないけれど、将来なにか成し遂げそうだな」と判断すると、ポーンと取材費を出すプロデューサーがいた。今はそんな人はめったにいない。人を育てなければならないプロデューサー及びその上司が半年、1年で評価されるからだ。

短期間で成果を上げなければならず、失敗が許されない。そのため失敗しないように卒なくこなすようになる。チャレンジとか、冒険はしなくなる。時間さえあれば、じっくりと案を練り、知識、情報を集め、技術を獲得して体力も作れる。全力を尽くして失敗したなら仕方がない。時間は皆に平等にある。反省し、失敗の原因を検討して、再挑戦すればいい。

短期間で人を評価すると、社会が澁んできてしまう。人も育たない。一日一日を大切にすると同時に、20年、30年後を見据えて生きていきたい。